説教20210411　ヨブ42：1-6　ヨハネ20：19-31

「自分を退け罪ゆるされる」 151　Ⅱ177　312

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

イースターおめでとうございます！、と言われても一体何が喜ばしいのか、と思われる方々も多いかと思います。それは或る意味当然で、ここにいる誰一人として、復活とか、体のよみがえりを体験した人はいないのですから。その喜びに身を持って１００％浸ることが出来る方は、今はまだおられないことと思います。

　クリスマスと較べれば、イースターの喜びは大きいのか小さいのか、ここに在るのか、向こうにあるのか、想像も着きません。まだクリスマスのほうは、この世に新しい命が与えられた喜び、といえば誰しもその大いなる喜びを具体的に思い描くことが出来ますが、イースターの復活の喜びは、私たちの思いや考えをはるかに超えて大きく、また私たちの望みをもはるかに越えているのです。

　そして、イースターの喜びは、私たちの今の悲しみや苦難と隣り合わせにあるものです。思い返せば、去年のイースターは4月12日でしたが、その時は今のように、喜びという事も全然頭に浮かんでこない状態でした。教会に遣わされました私は、人々を教会に招いていくことがその役割だと思っていましたのに、世の中の有様は、まるで教会の戸に鍵をかけよう、とするかのように荒れていて、毎日が悲しみと苦難の連続で在りました。しかし、今日の聖書箇所にもありますように、イエスキリストの喜びは、私たちの想像を絶していて、戸に鍵をかけようが、どこにでも悔い改める者の御そばへとやってきて下さるのです。

　また、イースターの喜びは、この世の喜びとは違うものです。受難日の説教で、血を流して苦しんでいる主イエスの足元で、その服をとって、服を分け合い、衣服のことでくじを引いていた兵士たちのことを語りましたが、この世の喜びというのは、このように主イエスの苦難から目をそむける為の、一時の余興に過ぎないのでありましょう。主イエスにある喜びとは、そのような一時で終わる余興ではなくて、死の苦しみが、永遠の喜びへと変えられる、いわば聖なる喜びであります。

　この聖なる喜びは、苦しみや悲しみと隣り合わせにあるもの、という事は、今、ここにもあるという事です。最愛の人にずっと逢えないでいても、、今は、社会的に施設の入口に面会謝絶の鍵が掛けられていたとしても、主イエスにある喜びは、どこにでも悔い改める者の内へとやってきてくださるのです。

さて、主イエスは、弟子たちの中にたち、復活のみ姿を表されてから、４０日後に召天され、父なる神の御もとへと登られましたので、今地上にいる私たちの目には見えません。ですから、今日お話しする弟子たちが、復活の主イエスと実際に出会って、その姿を目の当たりにした出来事と、私たちがこの復活節で体験する出来事もまた違ってくるのです。

　弟子たちは、ユダヤ人を恐れておりました。何故かというと、自分たちもイエスの仲間だという事で、ユダヤ人のリーダーたちに捉えられ、処刑されるのではないかと思って、びくびくしていたのです。その弟子たちの中にはペトロもいたことでしょう。ペトロの心の内はどんなだったでしょうか。ヨハネによる福音書18章18節によると、ペトロは「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」と問われた時、「違う」と言い返して、その僕や下役たちと一緒に火に当たっていたのでした。

　でも、この後、ペトロがこの僕や下役たちと行動を共にせず、主イエスに立ち返ったことは幸いでした。そのペトロは今、仲間たちと共に、自分たちの家に鍵を掛けて引きこもっているのです。弟子たちが自分の家に鍵を掛けた訳は二つあるのではないでしょうか。一つ目は、ユダヤ人のリーダーたちが自分たちを逮捕するために押し入ってくるのを避けるため、二つ目は、イエスを知らないといったペトロに代表されますように、自分自身が世の中の誘惑に負けて、世の中に迎合していくことを律する為、であります。ここには世の中と断絶した悲しみと苦しみがあります。そしてそもそもこの弟子たちもまたユダヤ人であり、ユダヤ人がユダヤ人を恐れるという状況ですので、そこには同胞の親愛の情が裂かれる痛みのようなものもあったことでしょう。

　主イエスが、弟子たちの前に立ち復活のみ姿を表されたのは、まさに、このような悲しみや苦しみ、痛みの只中でした。そして主イエスは弟子たちに言いました。「あなたがたに平和があるように」と。これこそ私たちが主日に平和の挨拶で交わしている「主の平和」

です。主の平和は、この世の喜びや、同胞の親愛の情といったものにはるかにまさっています。ですから、弟子たちは、主イエスを見て、喜んだのです。主イエスは「あなたがたに平和があるように」という一言で、弟子たちのその閉じられた家の中を、主の平和で満たされたのです。この一言で、悲しみが喜びへと変えられた、このことは神の業による奇跡であるでしょう。しかし、同時にこの業は、今の私たちに託された役目でもあります。今は主イエスは天上におられますので、その姿は私たちには見えません。私たちは「キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。」と祈りますが、そのキリストが完全にその姿をこの教会にお目見えするときはまだ来ていないのです。ですから主イエスは、私たちに「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」という言葉を託してから、天に登って行かれたのです。この言葉を残された私たちは、この世のどこへ行っても、「主の平和」を作り出す術を与えられています。この術を知らされているという事は、実に恵みであって、私たちはこの恵みを方々に告げ知らせたくなるでしょう。実際、この弟子たちも、この主イエスの恵みの言葉によって、引きこもりの家の生活から解き放たれることが出来たのです。

　では、トマスはどうでしょうか、トマスはこの家に入るのが他の弟子たちに較べて8日間遅れました。トマスはかつて「主よ、あなたがどこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」と主イエスに言いました。トマスは確かに疑り深い性格でありましたが、私たちも主イエスのことを信じているようで、このトマスのような疑問をしばしば発してしまうものではないでしょうか。トマスは、イエスや他の弟子たちと分かれて、行動していました。その道行もまた、悲しみや苦しみに満ちた者であったことでしょう。主イエスが復活されたことを聞きつけたトマスに、弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言いました。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」そう言いながら、トマスは主イエスが姿をあらわされるのを待っていたのでした。そして主イエスを見たトマスは「私の主、私の神よ」と言いました。このようにしてトマスもまた主イエスの復活の喜びへと招かれたのです。

　このように見ていきますと、確かに、主イエスは、道であり、真理であり、命であり、わたしを通らなければ、誰も父のもとにいくことが出来ないのですが、その道行きは各人各様であるという事です。そして、主イエスは、主イエスを信じ付いてくるものに、それぞれの仕方で主の平和をお与えになるという事です。ペトロもトマスも主の平和に満たされ喜びました。それは聖霊を吹き掛けられて、永遠の命に作り変えられていく喜びです。でも、今この時に完成する喜びではありません。先週の説教で、マグダラのマリアは、主イエスにすがりつこうとして、「すがりつくのはよしなさい」とたしなめられました。その理由は「まだ父のもとへ登っていないのだから」です。まだその時が来ていないからです。でもその時は確実にやってくるのです。放蕩息子のたとえ話で主イエス御自身が語られたように、その時には、父なる神は、放蕩息子に走り寄って、首を抱き接吻をされるのです。

　このように、最後の時に永遠の喜びが完成するという事は、実に「主の平和」であります。ヨブ記というのは４２章もありまして、昨年の11月の末からずっと、木曜の祈祷会で共に学びを続けています。まだ半分もいっていないのですが、毎回毎回これでもかという位、様々な苦難と悲しみと恐れが、ヨブと3人の友人たちに襲いかかるのです。主なる神はとことん苦難を私たちにお与えになられます。でも私たちは最後の４２章でのハッピーエンドを知らされています。ですから、毎回毎回、苦しみ悲しみと隣り合わせにある主の平和の喜びに満たされるように思います。

　これと同じように、私たちのイースターの喜びというのも、未だ完成途上にある、現在進行形の喜びといえるかも知れません。ですから、今この時に私たちに響いてくる主イエスの御言葉は、それに酔って喜ぶような甘い言葉ではないのです。それはどんな御言葉かと言いますと、今日の聖書箇所に出てくる、「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」とか、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」といった少々厳しめの御言葉なのです。この御言葉を聞いて、イエス様にすがりつきたくなるでしょうか。そうです、その時はまだ来ていないのです。私にすがりつく代わりに、「わたしの兄弟たちのところへ行きなさい」と主イエスは私たちにお命じになるのです。このような現在進行形の喜びは、最後の時の、私たちの想像をはるかに越える喜びに至るための一歩一歩なのです。

　さて、この弟子たちのように主イエスを目の当たりにした出来事のことを、今私たちは語り継ぎ、言葉によって次に伝えようとしています。主イエスがトマスに残した言葉、「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」という御言葉を、私たちは言葉の通りに素直に受け取ってまいりましょう。見ないのに信じる人は幸いなのです。今の世で、トマスのようにイエスを見ようとして力むよりも、「見ないのに信じる人は、幸い」という御言葉を素直に信じるほうがはるかに良いことでしょう。

今日の週報に掲げました聖句「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」も言葉通りに私たちが受け止めれば、主イエスがなされている、聖書に記されなかった多くのしるしが分かってくることでしょう。主イエスは私たちを用いて、現在進行形の喜びへと私たちを招かれようとしています。今日から掲げられました年間聖句、「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われる」という御言葉は、その現在進行形の救いの内にある喜びを言い表すものです。

この復活節から始まる一年、私たちが自らの口を用いて、救いの御業を推し進めるものでありたいと願います。

祈ります。

天にいます私達の父なる神

あなたは引きこもっている弟子たちに「主の平和があるように」という御言葉一つで、喜びをもたらされました。どうかその聖なる喜びが私達にも与えられますように。

今の世にあって、多くの苦しみ悲しみ痛みがある中で、私達があなたの御言葉を与えられていますことに感謝いたします。私達が、日々の生活におきましても、あなたの御言葉をほめ称え、賛美していくことが出来ますように。

諸教会を覚えます。新型コロナ渦にあって、多くの兄弟姉妹が恐れおののき心に鍵を掛けておられます。どうかその鍵を内側から開けて下さる御子の恵みの言葉により頼み、私達が恐れることなく、主の平和を告げ知らせていくことが出来ますように。

また、この世にあって、教会の門を叩こうかどうか迷っておられる方々も多くおられます。どうかそのような方々の背中を推すような御言葉をあなたが私達に植え付けて下さり、その言葉によって、又新たな求道者が教会に与えられますように祈ります。

父と聖霊と共に一体であって